NPO법인
삼천리철도

NEWS LETTER

三千里

Vol. 15
2010年1月号

発行
NPO法人　三千里鐵道
〒441-0109
愛知県豊橋市下五井町青木31
TEL.0532-53-6999
FAX.0532-54-4931

平和と統一の希望を作った

都相太理事長一行、統一部前長官らの招きで韓国訪問

昨年11月13日、都羅山駅で夢のような場面が演出された。統一部長官を歴任した林東源、丁世絃、李在禎の前長官が、NPO法人三千里鐵道・都相太理事長に感謝牌を伝達する行事だ。

三千里鐵道は、非武装地帯2kmの鉄道レールの価格にあたる680万円の誠金を、2002年に南北政府にそれぞれ直接伝達した。そして2007年5月17日、統一列車が汽笛を鳴らして、軍事境界線を越え朝鮮半島の南北を走る感激の日を迎えた。その瞬間を海外同胞は、どれほど待ち焦がれていたことか。想いとしては皆、その日、その列車に乗っていたのだ。この日を迎えるために募金をした全ての方々と、彼は日本でその感激を噛みしめていた。

これを常にすまなく思って来た当時誠金を受け取った丁世絃前統一長官と、列車試験運行当時統一部長官の李在禎前長官、そして2002年4月特使資格で金正日総書記に会って南北鉄道・道路連結を確定した林東源前統一部長官が、三千里鐵道関係者たちを招待し、今回の訪韓となったのだ。

その日の感謝牌には“貴下と三千里鐵道は韓半島分断と朝鮮戦争の結果として切れた南北の鉄道を連結する民族的な事業に誠金を出し、平和と統一の希望を作ってくださいました。”と記されていた。

鉄道連結で一応の目標を達成した現在、この過分な評価に驕ることなく、北域緑化や養豚団地建設など、平和と統一に向けた具体的な目標を掲げた。

訪韓初日、ハンギョレ新聞と統一ニュースの取材を受けた都理事長は“単純に言葉でする事業ではなく、実際に養豚でも植樹でも、そこで私たちが直接自分の汗を流しながらできる事業になったら良い”と、“それが次の世代の胸に実質的な統一を抱かせる事業になる”と語った。

随行した当NPO南相三副理事長、韓国問題研究所康宗憲所長など一行は、都羅山、板門店を経て14日、林東源、李在禎前長官に見送られ仁川空港を発った。

わが国の平和と海外同胞の役割

海外コリアンシンポジウム・世界大会、京都で開催

（関連記事5面）

感謝牌

日本NPO法人三千里鐵道
理事長　**都相太**

貴下と三千里鐵道は、韓半島分断と韓国戦争の結果として切れた南北鉄道を再び転結する民族的な事業に誠金を寄付し、平和と統一の希望を作って下さいました。

6.15南北共同宣言合意に基づき南と北は、2002年9月18日に京義線と東海線の鉄道と道路を連結する工事を同時に着工し、2005月12月31日に竣工しました。その後、2007年5月17日に試験運行を経て、同年12月11日南側汶山駅と北側逢洞駅間の定期運行を始めました。

この歴史的な鉄道運行は、民族の血脈を再び繋ぎ、韓半島の平和と統一の道を開きました。よってこれを記念し、貴下と三千里鐵道の貢献をたたえ、感謝しこの牌を授与します。　2009年11月13日

大韓民国　第25代　統一部長官　林東源
第29代　統一部長官　丁世鉉
第33代　統一部長官　李在禎

訪韓こぼれ話

左：丁世鉉、右後：林東源、右前：李在禎 各前長官

林東源

陸軍中将まで上り詰めた軍人出身外交官、全斗煥時代に失脚し転身。陸軍士官学校を卒業して38度線の前線基地で北と直接対峙した。軍の管理する都羅山展望台で、軍人の説明を聞いた後、にこやかに労いの言葉をかけながら気さくに握手するのだが、軍人は恐縮し元現地師団長を接するがごとく最敬礼し、誇らしく握手を受けていた。

南から板門店を見下ろす処でUNが管理する青の建物、北が管理する白の建物が見下ろせる位置。右横に車一台通れる道があった。そこを指さしながら、「ヨンヒョンムク北首相が最初に訪れたとき、ここで迎えた。当時は道がなかったので、二人で草むらをかき分けながら通った。その時私が”早く一緒に道を開きましょう”と話しかけたところ、ヨン首相も間をおいて”そうしましょう”と話された。

丁世鉉

12日、仁川空港には林東源、丁世鉉、李鳳朝氏らが出迎えてくれた。ぼくは李鳳朝先生の自家用車に丁世鉉先生と同乗した。車中、運転する李さんに「儲かっているようだね。こんな高級車に乗って」と。さらに「大学時代は勉強もしないで遊び呆けていたのに、今は失業しているのに、こんな車に乗っていられるのは幸せと思わないと…」

13日帰国前の晩餐で、街の料理屋・行きつけの店で。猥談・小噺の名手だ。無尽蔵にネタを繰りだす。食べて、笑って、また笑って…。林東源先生曰く－「自分が入院している時に病室に見舞いに来て、こんな調子で笑わしてくれた、病気が治ってしまった」、「生前の金大中大統領にTEL、大統領は食事中であったがせがまれて小噺を一席、その話を聞いて大統領、口にものを含んだまま噴出してしまった、と側近が話していた」

李在禎

プレジデントホテル、林東源先生主催の午餐の席で。ぼくが一番ラッキー。林東源、丁世鉉長官は南北問題で苦労ばかりしてこられた。ぼくは、5.17の南北鉄道試運転開通式のテープを切り、開城工団施設等の落成式テープを切る栄誉に浴してきた。

14日朝、明太汁専門店にて朝食、一品のみの営業、締めて4500ウォン。

ホテルから歩いて行き、庶民と一緒に片隅の席を占め、朝食を！　その後は色づく銀杏並木を歩き、喫茶店でコーヒーを！　セルフサービスなので支払いを済ませ、盆にコーヒーを載せて来た。都相太理事長曰く「この国はこんな庶民感覚を持った人が大臣になる、ダイナミックさを持っているのだ」

帰りは李在禎先生運転の車に乗って空港へ。

林東源先生がぼくに向かって、「前統一部長官運転の車に乗る気分はどうですか?」と、「ただ恐縮するばかり」と応えた。

空港で待つ間、林東源先生はぼくらに向かって「少しは贖罪になりましたか?」とにこやかに話された。都相太理事長「分を超える歓待に感謝します」、と応える。

（三千里鐵道ブログ　2009.11.26掲載　namsang）

紀行文

都羅山から板門店、そして開城へ

康宗憲
（韓国問題研究所代表）

左端が康宗憲氏

夢を見ているような2泊3日だった。11月12日から14日まで、幸運にも私は通訳として、都相太理事長の招請訪問に同行することができた。

11月13日、金大中・盧武鉉政権期に統一部長官を歴任された林東源、丁世鉉、李在禎の諸先生や、実務を担当された李鳳朝・元次官の案内を受け、私たちは汶山駅から都羅山駅までの9.6㎞区間を列車で走行した。2007年5月17日の試運転を機に貨物列車が定期的に往来していた南北鉄道は、当局間の関係悪化に伴い、昨年12月から運行が中断されている。残念ながら、現状では都羅山駅までの運行である。だが、都羅山駅のホームには、「南の最終駅ではなく、北への始発駅」と書かれた大きなボードがあった。連結された鉄路はまだ新しく、列車の走らないレールは物悲しげに真っ直ぐと北に延びていた。

都羅山駅には、金大中・ブッシュの両首脳が2002年2月に訪問し、それぞれ枕木にメッセージを残している。関係者の好意で、私たちも記念の言葉を枕木に記すことになった。　私は欲張って、少し長い目のメッセージにした。「不信と対決の壁を越え、和解と協力の精神で連結した鉄路。その路上にこそ、我が民族の永久なる平和と繁栄があるだろう」と。

南北出入事務所で説明を受けた後、乗用車で板門店へと移動した。最前線部隊とは思えないほど、指揮官や兵士たちの言動には余裕が感じられた。3日前に西海で南北海軍の銃撃戦があったので、かなりの緊張した雰囲気を予想していたのだが、拍子抜けだった。北側の「板門閣」からは人民軍兵士が一人、望遠鏡で私たちを監視している。2001年8月15日、ピョンヤン経由で汎民族大会に参加し、「板門閣」から南側の「自由の家」を眺めたときのことを、ふと思い出した。分断の、気の遠くなるような歳月が、今も続いているのだ。その苛酷な現実に容赦なく直面するのが、ここ板門店である。

朝からの小雨も止み、屋上の展望台からは開城工業団地の全景がパノラマのように見渡せた。政治の荒波に翻弄されながらも、南北の経済協力は着実に進んでいる。たとえ幾多の紆余曲折を経ようとも、決して放棄も断念もしない、民族統一への不屈の意志を具現した眺望である。統一祖国の未来像を見るようで、何枚も写真を撮った。望遠鏡で見ると、開城市内を行き来する市民の姿が、手に取るようにはっきりと見える。

実り多い訪問だった。私たちは、感動と感謝がこみ上げる至福の時を過ごした。林東源先生は今回の訪問を、遅ればせの“贖罪”だと言われた。2007年5月17日、歴史的な試運転に招請できなかったことを、申しわけなく思っておられるようだ。でも、三千里鐵道と都相太理事長は今回、「残り福」ならぬ「遅れ福」を満喫した。そして、同行を許可していただいた私は今、友人諸氏からは「羨望の的」である。祖国の平和と統一に微力ながら尽くすことで、応えて行きたいと思う。

都羅山展望台から臨む、開城市

三千里鐵道一行 都羅山駅に立つ

ここは「南の最終駅ではなく、北への始発駅」

11月12日正午前、仁川空港には林東源、丁世鉉統一部前長官、李鳳朝前次官が出迎えてくれた。ホテルで林東源前長官の歓迎午餐では、すぐ打ち解けたムードに。

ハンギョレ新聞、統一ニュースの取材。都相太理事長生まれて初めて泊まるスィートルーム別室で行われた。

翌日汶山駅まで車で移動、列車に乗った。少し興奮気味。車窓に見える標識にも胸は高鳴る。

やたらと鉄条網が目に入る。隣の車両からマスクをした憲兵が入ってきた。一瞬在日はドキッ!同行した統一ニュース・金編集局長とマスクをとって会話する素顔は、幼さの残る女性兵士。ホッとする。

やがて列車はイムジン河を渡る。曇り空の下を流れる滔々とした流れを、感慨深げに見下ろす都理事長。全員沈黙して、しばし想いに耽った。

今回の訪問を実現させた二人の主人公。都理事長、破格の待遇に驚きながらも、はにかみながらどこか誇らしげだ。3人の前統一部長官連名の感謝牌を頂き、枕木に想いを刻んだ後の晴々とした表情!

丁度韓国に滞在していた姜貞子・奈恵姉妹も同行した。男ばかりの一行に華を添えた。この会議室は、度々南北接触が行われたところだ。

都羅山展望台では軍の将校から開城工団を見ながら説明を受けた。一通りの参観を終えて北の板門閣をバックに記念写真。

“統一のその日が見えるようだ”

京都・海外コリアンシンポジウム開催　林東源前長官講演

昨年12月5日、在日コリア協議会が主催する海外コリアンシンポジウム・世界大会が開催された。

参加者は、320人を越えた。北は山形県、南は九州をはじめ日本各地から集まった同胞らと、米国、中国をはじめとする世界8ヶ国の海外僑胞代表、そして友好的な日本市民らであった。

開会宣言に続き在日コリア協議会・鄭小鎔会長の開会辞に続き、今回の世界大会尹勇吉実行委員長が演壇に上がった。

彼は今回の大会を準備する全過程を通じてわが国の統一への思いを持ち続けた、統一されれば皆一緒に飛行機に乗って祖国を訪問しよう、その日は今日のこの参加証のワッペンは無料チケットになると話すと、場内は一層和気あいあいとした。

1部の基調講演最初は、大阪市立大学の朴一教授が「南北経済協力の成果と課題」というテーマで講演した。

講演で彼は、キム・デジュン、ノ・ムヒョンの10年間続いた包容政策の成果と問題点、包容政策を再検討するという現政権の主張にもかかわらず包容政策で成し遂げた南北経済協力の実状と背景について具体的な数字を上げ説明した。

学生たちを連れて板門店を訪れていると言いながら講演者は、自身のしていた時計を外し“この時計は開城工業団地で生産された1万5千円のものです。今日を契機に皆さんもロレックスをやめてこの時計をしましょう”と訴えるや、場内に明るい微笑が広がった。

“次はイム・ドンウォン先生が主題講演をします。”

司会者の紹介があった。講演者はまず、主催側の労苦をねぎらい、今回の招請に感謝の気持ちを述べた。そして講演主題の「わが国の平和と海外同胞の役割」について講演した。

“私たちの民族が当面した至上課題は、分断を克服して統一を成し遂げることです。そのためには、冷戦を終わらせて平和を作らなければなりません。 南と北は不信と対決を終わらせ、和解協力しなければなりません。”

参加者らは最初の言葉から講演者の話す世界にのめりこんで行った。

同胞らは海外にいて常時感じる祖国分断の痛みと前途の見えない状況の中で苦しみさ迷ってきた。「拉致問題」で猛威を振るう日本世論に苛まれ、胸のしめつけられる思いで生きてこなければならなかった。 その同胞らに、南北交渉と首脳会談を導かれた講演者の断固たるこの一言は、前途を明るく照らす灯台になり、温かな父母の慰撫になったのであろう。

講演後半部分「海外同胞の役割」では、日本の三千里鐵道と米国僑胞組織の活動などが紹介された。（講演内容9P参照）

各国からのパネラー発言の後、司会者は今日の結論は林東源先生の基調講演で述べられたように、統一しようという点に集約された、統一しよう! これが今日の結論だと結んだ。

第2部懇親会は、さながら祭りの場になった。

2日目は京都観光が企画された。 林東源ご夫妻をまじえ、60人余りが一日観光に出かけた。

以下何人かの感想を紹介する。

“林東源先生のお言葉は分かりやすく、内容がはっきりと伝わってきた。日本での報道に混乱する自身を顧みる機会を得たようだ。何か統一が近づいたような、現実的に目の前に近づいてくるような感じを抱かせる講演であった。”（京都市キム・ヨンジャ氏）

“南北統一は世界平和に続くと痛感した。世界各地で活動する方々のお言葉を聞いていると、統一された祖国を想像させた。”（大阪カン・シネ氏）

会場風景

パネルディスカッション

広隆寺境内

新年の辞

南北共同宣言 10周年の新年にあたり

日本NPO法人三千里鐵道
理事長　都相太

今年は、南北共同宣言10周年に当たります。

宣言を履行した両大統領は惜しまれながら昨年逝去されました。

李明博政権は現在、この共同宣言に逆行する政策を打ち出していますが、平和と統一に対する希望は、いささかも毀損されないと確信しています。

●

NPO法人三千里鐵道は、昨年11月に非常に貴重な経験をしました。その経験は、驚きと恐縮の連続でもありました。

第25代統一部長官・林東源、第29代統一部長官・丁世鉉、第33代統一部長官・李在禎、この3先生からの便りで、2007年5月17日の南北鉄道の開通式に当NPOを招請しなかったことへの侘びと、ぜひ訪韓してその穴埋めをさせてほしいとの内容でありました。

当NPOは、2002年南北両政府に対し非武装地帯の鉄道線路資金として同額の募金を届け、鉄道開通の報に接し会員および協力してくれた多くの人々と喜びを分かち合い、南北鉄道の開通こそが最大目標の一つである当NPOにとって、その事実だけで十分でありました。

訪韓は11月中旬2泊3日の旅で、3人の元統一部長官の歓待を受け、京義線で都羅山駅へ、掲げられた大きな歓迎横断幕に当惑し、3人の署名入り感謝牌を贈呈され、駅構内に準備された南北の出入境の施設も見学しました。案内者の都羅山駅が終着でなく始発駅であるという説明に、大きな感銘を受けました。

今回の訪韓の目的はもう一つありました。

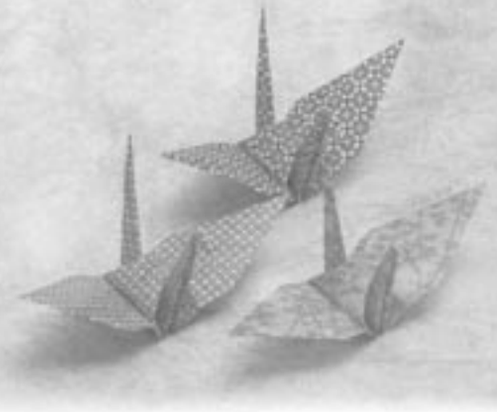
当NPOが次の事業として目指している養豚団地の建設のことで、金剛山観光と開城工業団地を運営管理している現代峨山を訪問することでした。私たちは現代峨山本社を訪問し、趙建植社長から北の地で実施されている養豚事業の現状と対策について直接お話しを伺うことができました。

南北関係が閉塞状況の中、金剛山で飼育している1000頭余りの豚のうち800頭が飼料不足で餓死したという報告に落胆したものの、養豚事業の重要性を強調した担当者の認識に共感し、南北両政府による農畜産特区の設立こそが急がれるという点で合意をみました。

●

今年は三千里鐵道発足10周年でもあります。あらためて、南北の平和構築と統一への指針を具体化した二人の大統領の逝去を惜しみながら、その思想と実践を継承する一年の始まりにしたいものです。

皆さまの健康と幸せをお祈りします。



年賀

新年を大転換の年に!

ソウル大公園動物園・南北合作の“統一虎”

新年を大転換の年として迎えましょう。

韓日合邦100年、朝鮮戦争60年になるが、韓半島の分断は続いています。

6.15共同宣言と10.4首脳宣言で分断克服の道を求めましょう。

いつも祖国の山河を一つに繋ぐことに尽力されている三千里鐵道会員の皆様に、心から感謝します。今年6月の貴NPO法人設立10周年記念行事に招かれ、皆様と希望や喜びを共に分かち合えることを嬉しく思います。期待しています。

前統一部次官　李鳳朝

ウリナラが歴史上初めて地図の上から消えた1910年。

祖国と民族の真の解放は統一祖国を回復することなくしてはない。

祖国統一は夢でも何でもない。実現すべき課題なのだ。

当NPO事務局長　韓基徳

『2010年初夢』

早朝名古屋市の自宅から、『超特急名古屋駅』に向かい、ロンドン行の始発に乗って、海底トンネル経由でソウル、ピョンヤンを経て夜半にはロンドンへ。そんな日がいつか実現しますように。そのために今を大切にしていきます。

当NPO副理事長　姜春根

その道は、あるいは一直線ではないかもしれない。でも、三千里鐵道の枕木は必ずや平和の大路になるはずだ。

元朝日新聞編集委員　波佐場清

日本海にも「三千里航路」を

戦前、朝鮮に中国にロシアに日本軍が攻め込んだ日本海に今年、友好の「三千里航路」が開通しますように。

行政評論家　野村光司

豚に目と鼻を

韓国併合100年、三千里10年。今年は寅年ならぬ亥年に。朝鮮半島では亥は豚を指す。まだ輪郭だけの豚の顔に、ぜひ目鼻を。

当NPO副理事長・作家　磯貝治良

物と物とのあいだ。ひと続きの時間。「間」を辞書で引くと、このように書いてあります。

2010年は「時間・空間・人間」を自分自身で感じながら、共通の「間」を大切に頑張りたいと思っています。

当NPO事務局次長　孫勇一

私と三千里鐵道

「三千里鐵道」は、地上に走る銀河鉄道のはじまり

姜　貞子

6.15の余震が在日同胞社会に残っていた2000年のある朝、私は三千里鐵道の報道を、夫と共に新聞で見た。そこには私の実家近くに住む都相太氏が、非武装地帯の鉄路を我々の手で、と募金を訴える内容が記されていた。私も夫も、そのアピールに心を動かされた。

それとなしに会話する中で、徐々に幼いころの思い出が甦ってきた。確か弟さんとは同級生で幼馴染、お兄さんとは面識はなかったが、なぜか懐かしさと誇らしさがこみ上げてきた。

数日後、夫は見ず知らずの一同胞の志に感銘し、100万円を三千里鐵道に振り込んだ。その後も企業経営の傍ら、理事として草創期の当NPOの発展に尽力した。

当初の記憶で強烈に残っているのは、2001年に名古屋市公会堂で開催された記念集会で司会を担当したこと。最初の大集会でもあり本国からも著名な方々が多数見えられた。この大舞台で私は司会を任されたのだ。

私はここ一番の舞台には、必ずチマチョゴリで臨むことにしている。朝鮮半島の大地図を背景に、当日私はあまりにも緊張しすぎて、司会の任を全うできたのか心もとない。ほろ苦い記憶と共に、共に夢を描いていた日々が懐かしく思い出される。

あれから数年の間、私の周辺で様々なことが起こり、気にしながらも疎遠になっていった。

それでも2007年5月17日に、統一列車試運転があった時の感動は今でも忘れない。

（いつか私もあの列車に乗りたい）と密かに思っていた。

それが今回、降ってわいたように実現したのだ。昨年11月、3名の元統一部長官招請により都相太理事長一行の韓国訪問が実現したのだ。私も夫朴泰秀の名代として、妹と一緒に同行を許された。

その日、緊張と期待におどる胸を鎮めながら、私は一行と共に汶山駅から都羅山行の列車に乗り込んだ。車窓から、鉄条網の彼方に広がる冬景色を眺めながらしばらく走ると、イムジン河の標識が目に飛び込んできた。枯れた木々や畑を過ぎ、やがて列車はイムジン河にたどり着いた。曇った冬空の下を水鳥が、数羽ずつ何組も飛び交っている。

鉄橋に入った。それまで弾んでいた会話が一瞬途切れた。ガタゴトという車輪の音だけが車内に響いた。皆だまって滔々と流れる河の流れを見つめていた。

ふと私の脳裏に日本で一生を終えた大好きなハルモニの姿がよぎった。また、北に帰り数年前亡くなったウェハルモニの生前の面影も…。そして統一を願いながらイムジン河の歌を共に歌った多くの友人や仲間たちの顔が走馬灯のように浮かんでは消えた。思わず熱いものがこみ上げてきた。

●

都羅山駅プラットホームには「ソウルから56㎞、平壌まで205㎞」と記された標識が立っている。その横でNPO法人三千里鐵道への感謝牌伝達式があった。簡単な式典の後、私たちは枕木にそれぞれの想いを記した。

私は「三千里鐵道　朴泰秀・姜貞子」と記した。

三千里鐵道は、私にとって地上の銀河鉄道だ。三千里鐵道は、鴨緑江を越え中央アジアを経て灼熱のアフリカ大陸を走り抜け喜望峰に至る、壮大な夢の始まりだ。夫婦共にこの夢を語り、追い求めて行こうとの決意を込めた。

左が姜貞子さん

基調報告

「わが国の平和と海外同胞の役割」抜粋

海外同胞の役割

尊敬する参席者の皆さん

私は今日この席を借りて、海外で祖国の平和と統一のために多くの寄与をしてこられた海外同胞の皆さんに、心よりの感謝と敬意を表します。海外同胞の役割について話してくれるようにとの主催側要請により、私の所見を簡単に申し上げます。

まず海外同胞が分断意識を克服し、求同存異（差異はしばらく保留し、共同の目標を追求）の情神で同胞社会の和合と協力を目指さなければならないでしょう。また新世代の民族教育にも力を傾けるべきでしょう。このことが祖国の平和と統一を成し遂げるための重要な基礎になると申し上げたいのです。

在日コリア協議会は、在日同胞社会が本来一つの根に基づいていることを確認し、思想・信念・所属を超越して祖国の自主的平和統一を実現し、さらに国際的協力を得るための同胞社会の大和合に努めています。〈在日は和合! コリアは平和! 世界は融和!〉実現を目標にネットワークを形成し活動しています。大きな感銘を受けました。まさにこのような努力が同胞社会の大和合と共に祖国に対する理解を高め、平和と統一を実現するのに寄与することと確信します。

二番目に、同胞社会は平和と統一を指向し祖国との連繋を強めていかなければならないでしょう。そのためには、民族全体の利益のための事業を指向することが望ましいでしょう。

名古屋の都相太理事長と三千里鐵道は6.15共同宣言に呼応する具体的な行動として、非武装地帯の鉄道建設に貢献しようと誠金を集めソウルと平壌当局に直接伝達したことがあります。非武装地帯4kmの鉄路は、名古屋三千里鐵道会員らの誠心で設置連結しました。北朝鮮に対する苗木支援事業も展開しています。また毎年6.15記念講演会を開催し、ニュースレターとインターネットを通じ祖国の便りを伝える事業も展開しています。真に6.15共同宣言の精神を具現する模範的な事例であります。

三番目に、居住国の政府と議会、言論と市民社会などに影響を与える活動を展開できるでしょう。祖国の平和と統一の問題に関する正しい理解と支持、そして友好的な政策を採択させるのに寄与するのです。海外同胞は大部分韓半島問題に直接間接に関係する日本、米国、中国など6者会談参加国に居住しています。韓半島平和と統一のためにはこれらの国の支持と協力が必須です。

米国の6.15共同宣言実践委員会（共同委員長呉寅東博士）は、在米同胞の広範囲な意見を集約して〈韓半島平和体制と統一のための政策建議書〉を作成し、新しくスタートしたオバマ行政府と上下両院に提出し、説明会も開きました。このように行政府と議会に影響力を行使するための努力を傾注しています。

この建議書の中に、過去60余年間米国の対北朝鮮敵視政策は全部失敗しただけでなくむしろ核開発という逆効果を招いたと指摘し、米国指導者らの対北朝鮮認識変化を促しました。北朝鮮をありのまま認定し関係正常化を推進し、韓半島の平和を定着させる新しい接近が必要だとし、いくつかの重要な方策を建議しました。勇気ある行動に敬意を表わします。

海外僑胞の皆さんのこのような同胞社会の大和合と祖国を愛する献身的努力が、わが国の平和と統一を操り上げるのに大きな力になることを信じて疑いません。盛う一度在日コリア協議会の活動に支持と声援を送り、より一層の発展を成し遂げることを祈願します。また皆さんの健康となされる事業の成功を祈願します。

ありがとうございます。

Interviews ● 인터뷰

三千里鐵道 都相太理事長とのインタビュー

ソウル市プレジデントホテル26F
金チグァン記者／2009.11.12

□統一ニュース：

2002年に訪韓して三千里鐵道が募金した基金を統一部に伝達した。三千里鐵道に対して、南側読者はよく分からないので、三千里鐵道がどんな団体で、どのようにして南北に鉄道連結基金を出すようになったのか説明してくれ。

■ト理事長：

6.15共同宣言合意事項の中に南北の鉄道連結というのがあったが、それを聞きとても感動した。そのまま受動的に政府がすることを待っていて良いのか。そうではない。私たちが主体的に積極的に民間次元でできることは何かと思い、非武装地帯南側2㎞、北2㎞、4㎞区間を私たちが鉄道を繋ぐのに協助したいという意味で始めた。それがきっかけになり三千里鐵道を作るきっかけになった。

□南側では普通NGO（Non-Governmental Organization）だが三千里鐵道はNPO（Non-Profit Organization）だ。特別な理由はあるか?

■日本では法である資格を得るためにはNPO、ノンプロフィット団体という資格を得れば、民間次元で積極的に仕事ができる。それで非政府的な性格を強調するよりは“これは一法人だ”という側面を強調したかった。また法人だが営利を目的にしないという性格を強調して NPOとした。

□三千里鐵道設立当時、周辺の反応はどうだったか?

■6.15共同宣言が在日韓国人に与えた感動は、言葉では到底表せない。“具体的に何をするのか”、三千里鐵道は具体的に鉄道を連結するのに積極的に、直接的に取り組むと訴えた。とても反応が良かった。

その頃よくあった場面は、民団と総連が酒席を一緒にする時、象徴的に南側焼酒と北の焼酒を交ぜて飲むことだったが、それももちろん意味があるが、何かもっと具体的で実質的な統一事業を民間次元でできないかと思い、三千里鐵道は鉄道連結事業支援にした。このように具体的な事業をしたのは、多分当時三千里鐵道以外にはなかったようだ。

□2001年9月30日に出帆し、2002年3月には募金を持って訪韓し統一部に伝達した。あの時680万円ずつを南北に出した。当時南側と北側政府の反応はどうだったか?

■南側では当時丁世鉉長官がとても喜び、暖かく慰労をしてくださった。とても良いことをされたとおっしゃってくださった。平壌では官僚主義的な対応だったように記憶している。直接的にこの事業に対して感謝するという言葉以外にはあまり感じたところがなかった。

しかし私は北へ行った時一つの要求を出した。“直接鉄道連結する最前方に連れて行ってくれ、現場を

見たい”と言った。北もこころよく聞いてくれ、直接そこまで案内してくれた。開城市内の伝統的な家屋でとても美味しい食事の接待も受けた。そこでも人間的なもてなしは受けた。

□2002年政府に誠金を寄付してから、その後もずっと募金運動はあったか?

■南北両政府に募金をお持ちしたのが一つの結び目だった。その後も募金は継続されたが、やはり直接政府に基金をお持ちしたのが一つのハイライト、それが一つの区切りになったようだ。

□その後南北鉄道開通式があり、運行は中断された。その時の心境はどうだったか?

■鉄道が直接繋がれた瞬間というのは、何とも言えない感動を受けた。統一を実感することができた瞬間であった。私たちのした運動は決して大きい運動ではないし、とても微弱であったかも知れないが、6.15宣言の中に入っている鉄道連結という事業に対して受動的に眺めるのではなく、積極的に取り組み長年の夢と希望を果たしたという満足感があった。

□鉄道連結の一主役だったが、当時開通式に参加することができなかった。心境はどうだったか?

■元々政府に何かを望んでした運動ではなかった。私たちがそこに直接参加したことに意味があり、その列車に乗ったか、乗らないかは、そんなに大きなことではない。実際に鉄道が東海線と京義線で繋がったことだけで、私たちは満足であった。その瞬間に招待されず、列車に乗ることができなかったことに対して、一つも不満はない。

　それより実際に鉄道が繋がった後、“これから三千里鐵道をどのようにしようか”という問題が頭をもたげた。考えあぐねた末、北に木を植える事業、植樹事業をすることが一つ、それと北地域で養豚団地をつくり、豚を飼って生活改善の足しにすること等を考えた。今度の訪韓はそのための調査や協議、支援を求めるためだ。この間、統一部の三人の前長官と李次官に相談し、ソウルの民間団体らと共にできる仕事がないか模索している。

□その間6.15記念日をきっかけに、多様な南側人士を迎え講演会などをしてきたと聞いているが、鉄道連結以外の他の活動に対しても紹介してくれ。

■財政的に余裕のある団体でもなく、会員数が多い団体でもない。それでも6.15精神を守り生かして行く上で必要だと思って講演会も組織して来た。今はインターネットを通じて広報活動(ブログの開設)、会員・支持者へのニュースレター配信等と、三千里鐵道の運動領域を日本社会に紹介する運動を続けている。

□今日の空港迎接で、前長官たちが多かったが、講演などの事業で結んだ縁のためか?

■そうだ。2001年6.15　1周年の時には雰囲気も良かったので、統一マジの朴容吉長老様を含めて李在禎先生等10人位の方々に来ていただいた。2002年には李時雨先生と林秀卿さんも来た。以後　6.15記念日を迎えて丁世鉉長官、林東源長官を含めて招待し、名古屋地域等で講演会を行った。

□ワンコリアフェスティバルみたいな若者の集まりもあり、在日コリア協議会でも活動していらっしゃるが、在日同胞たちの団結や活動についてどんな考えを持っているか?

■在日コリア協議会というのは、在日同胞社会に存在する民団、総連という両大組職以外にも、多くの団体や有志が散らばっているので、それをネットワークで繋ごうという目的でつくられた。。私も元々そんな考えを持っていたので参画した。

□一時、民団と総連が合意に達し、雰囲気良かったが、すぐ壊れた。易しくない事か?

■民団という組織体が持っている限界がある。そんな影響があって、民族問題、統一問題に対しては、前向きなアイディアとか姿勢が見えない。

□今、北日関係が良くない。在日同胞の境遇が難しくなっていると聞いたが、実際に感じること、それとこの問題の解決には何が必要か?

Interviews ● 인터뷰

■非常に答えにくい質問だ。実は北日関係が在日同胞社会に与える影響は深刻だ。世論もそんなに良くない。その矛先は主に朝鮮国籍を持ついわば総連係同胞社会に向けられている。それでも民族意識を持って民族を守ろうとするその方々の姿勢に対して、ある面では肯定的に評価をしなければならないと考える。私たちにできる事は何か、北と日本政府に対して在日韓国人社会に何ができるか。私たちに日本世論を少しでも好転させる上で何ができるか。そんなことを思いながら運動課題を模索している。

□最近日本で民主党が政権交代したが、民主党執権以後に対北政策は変わったか?

■民主党内部でも対北政策は微妙で敏感な問題だ。少し時間をおいてみなければ…。民主党の対北政策が突然大きく転換することは考えにくいと思う。

□2002年一緒に訪韓された近藤昭一（50）議員も民主党所属議員だと聞いているが、その方々の考えはどうなのか? 今も議員か?

■今回の選挙でも当選した。名古屋地域の衆議院議員だ。民主党内では重鎮ではなく、中堅級議員である。現在は党の総務委員会委員長だ。

□日本での総連と民団の団結問題を話したが、ワンコリアフェスティバルとも関連があるか?

■共にできる問題に対しては手を取り合っている。人間的紐帯を深める関係だ。あれこれ打算していては、団結できなくなる。今はワンコリアフェスティバルでも、在日コリア協議会でも、共通する部分に対しては積極的に行動を共にしている。

□ワンコリアフェスティバルは今、財団を作ったのか?

■これからだ。準備している。

□6.15海外側の委員でもあり、6.15日本地域委員会副議長でもあるが、日本地域での6.15委員会に関する最近の活動は?

■6.15実践日本委員会が今、日常的に取り組んでいる活動はない。しかし、南側政府で注目をしていることは事実だ。私にも領事館から関心を持たれ、ときおり連絡が来る。

□企業家なのに、統一問題にも関心を持ち、積極活動するようになったきっかけは?

■直接的なきっかけになったのは、73年に金大中拉致事件だ。そんな残酷な犯罪を敢行する政府を、決して受け入れられないという怒りを、その時は押えられなかった。それが政治や民族運動に関わる一つのきっかけになった。

□事業をしながら活動するのは、負担にならないか?

■金銭的な負担より、運動に参加しながら多くの方々が行き来するようになった。そんな人間的な交流が私にはより大切である。

□兄弟も平和活動家、奥さんやお子さんを含め、家族が社会活動に積極的なようだが?

■在日韓国人はどうしても日本社会で、疏外されて暮す。ところがこのような民族運動に参加することで私は、生きているのだと実感する。このことが私にとってとても重要だ。

□ご家族も含めて運動するのは、まれなことでは?

■稀ではあるが、それが私だけではなくうちの家族全員が、生甲斐を実感しながら暮らすことに繋がる。

□2002年に続き明日、鉄道現場に行き、分断の現場に行く。どんな心境か?

■今年4月にも一人で都羅山駅に行った。第3トンネルも見た。それを見ながら常に感じることは、分断がどれほど民族のエネルギーを消耗させる愚かな事なのかを、今更ながら感じた。海外に住む同胞の一人として、分断の象徴的な地域で何か寄与することができないかと、その時感じた。多分明日も同じことを感じるような気が

する。

□日本にいる在日韓国人青年たちが持つ、統一に対する関心や考えは?

■ 若い世代の中には、統一に対する関心と愛情がある人もいれば、ほとんどない人もいる。先輩の世代として言えることは、若い世代が統一を実感することのできる機会を持てなかっただけなのでは、と思う。だからそんな機会を作って行くことも先輩に課せられた責務のように思う。だから今後も、若い世代が統一すればこんなに変わるのだと具体的に実感できる事業を行えれば良いと思う。そうすれば若い世代の考えも、少しは変わるのでは…。具体的な事業というのが、鉄道を連結させることであった。これが統一なのだと、実感することのできる事業が必要だ。

□李明博政府になって南北関係が難しくなった。最近西海交戦が発生したが、どのように感じるか?

■ことが起きるたびに一喜一憂しないということが、三千里事業をしながら得た教訓だ。とにかく紆余曲折はあるが、我が民族の歴史は統一に向かっているのだという大きい流れを見て、その過程で起こる事件に一喜一憂しないことだ。弛まず、ゆっくりと、しかし統一の歩みを止めないことが重要だ。

□これから北植樹や養豚などの事業を具体的にする計画か?

■言葉だけでする事業ではなく、実際に養豚にしても、植樹にしても、私たちがそこで直接自分の汗を流しながらできる事業にしたいと考えている。それが次の世代に、実質的な統一を実感させる事業ではないか。これが直接自分が汗を流しながら統一を作る事業だ。

□最近北に行ったのはいつか?

■2002年。もう中国経由しては行きたくない。南からまっすぐ行きたい。

インタビュー場所から見えるソウル市街

北からの誠金受取証を撮影するカメラマン

随想

追憶に甦るあの匂い

金剛山に養豚団地を！
“地に足のついた統一運動”

南　相三
（NPO法人三千里鐵道・副理事長）

豊橋市から名鉄線に乗れば2駅目が小田渕だ。今は無人駅なのでどこかひっそりしてみえる。

この駅近くに小さな川が流れている。川岸ではヤギがのどかに草を食べている。ヤギを放牧しているのだ。堤防の片隅にプレハブが立ち、入口には「NPO法人・山羊のいる風景」と書かれた看板がかかっている

ぼくは時折ここを訪ねる。昨年から三千里鐵道の手伝いをすることになり、都相太理事長と仕事の打合せを兼ね立ち寄る。

ある日のこと、いつものように都理事長は忙しく仕事をしていた。何かの集いには必ず背広姿なのに、ここでは長靴にジャンパーといういでたちで忙しく動く。ちょっと見ては分からない。

その日も手にバケツを持って行く理事長に声をかけると、振り返って満面の笑みで迎えてくれた。

“ちょっと待って”といいながら作業を急ぐ都理事長のそばで、ぼくも邪魔にならないように気を遣った。都理事長は豚舎に近付いて、餌を注いでいる。豚らはブーブー啼きながら餌箱に鼻を突っ込んでいる。

理事長はしばらく愛おしむような眼差しで見下ろしていた。ぼくも餌を食べる豚を、鉄格子の間から見つめた。するとその中の一匹がぼくを見て、もっと餌をよこせと言わんばかりに小さな目を思いっきり開けて、鼻を突きだしブーブーと啼いた。その声を契機に頭ごと餌箱に沈めていた他の豚たちも一斉に頭をもたげた。皆小さい目を精一杯あけて、鼻を突き出しクエークエーと大合唱だ。

その時ぼくの足下からプーンと何かが臭ってきた。豚糞の臭いだ。視線を落とすと、人の気配に驚いた銀蠅らが飛び回っていた。

この臭いと蠅…。いつしか幼少期の体験がぼくの脳裏によみがえった。

ぼくは幼年期を同胞部落で育った。太平洋戦争末期、日本軍の戦略的要衝地であった豊橋市が爆撃にあうや、近郊の小坂井町に避難した。避難先の部落には、住友金属工業という軍需工場を建設する時に日本各地から集まってきた同胞労務者らが居住していたバラック建ての住宅が残っていた。工事が終わった後は、ほとんど廃虚に等しい所であった。

今は豪勢な瓦の家に洋風建物が建ち並ぶが、当時は例外なくアバラ屋だけだった。ブリキでなければ杉皮で屋根を葺き、お隣りとは板一枚で仕切り暮らしていた。

生業は食糧難の時期でもありさつま芋を蒸して水飴を作り、屑鉄商売、ニコヨン労働（一日働いて240円稼ぐ日雇いのこと）、養豚などで生計を立てていた。その中で養豚は誰でも簡単に始められたので、殆どの家庭が子豚を買って育てた。

人より豚の数が多かった。大人たちは早朝まだまっ暗な時から豚の餌を蒸し、子供たちは餌をせがんで啼く豚のなき声で眠りからさめていた。

皆が貧しかった頃、特別な遊びがあったわけではない。それでも自転車の車輪を転がしたり、　地面に線を引きケンケンパをやったり、時には遊びを創案しては遊んだりもした。夏には川辺に行って遊んだ。小川の流れに身を任せ海まで「遠泳」、時を忘れ遊び転げて日が暮れて、帰ってきて大人たちにしっかりと叱られた記憶もある。

子供たちの中で一番人気のあった遊びが鬼ごっこだった。夏の夜、村中を舞台に繰り広げられる鬼ごっこ(当時は‘巡査泥棒ごっこ’と言われていた)に、夜のふけるのも忘れて遊んだ。子供たちはそれぞれ巡査の目をくらまそうと、狭い路地裏に隠れたり、雑草の茂った草むらに身を潜めたり、また当時まだ残っていた防空壕の中に身を隠すものもいた。

ある日ぼくは「巡査」の視線がずっと下に向かう姿を見て、豚小屋の屋根に上がって隠れた。ぼくはきょろきょろと見回す「巡査」の子供を見下ろしながら、ほくそ笑んだ。そして、そろそろと動こうとした瞬間、屋根から抜け落ちてしまった。粗雑に作られた豚小屋であった。いくら子供といっても、その重さを支えることができなかったのだ。疲れて寝ていた豚君たちの上に見事にもんどりうってしまった。突然のことに仰天した豚君らが大騒ぎをした。そのせいでぼくは、巡査に発見されてしまった。ぼくは恨めしそうに豚小屋を振り返りながら「連行」されていった。

当時は下水道設備、アスファルトもない時期だったので、豚の糞尿は豚舎の周りに溝を掘って流した。通りの両端に積み上げることもあった。梅雨の時期には糞の水が道端にあふれた。真夏の暑いころは糞の臭いに村中むせ返り、息がつまりそうになる。

それでも子供たちはたくましく育った。ぼくは小中級学校を経て高等学校は名古屋の民族学校に通った。帰ってくる時はいつも小田渕でおりた。駅に降り立つと、ぼくの住む部落の方角から、風に乗って匂いが漂ってくる。するとぼくは、決まって口笛を吹きながら川沿いの堤防を歩き家に向かった。

その時から数十年の歳月が流れた。東京での都会生活を経てすっかり様変わりした豊橋に、ぼくの育った部落に戻った。

あの日都理事長と一緒に嗅いだ糞尿の臭いは、数十年の歳月を一瞬にして狭めてくれた。臭いは、匂いとも言う。そして臭い（クサイ）にもなる。この瞬間、その豚糞の臭いが遥かな追憶の中に蘇り、芳しくさえ思えたのは過ぎし日々への懐かしさのなせる業であったのであろう。

「山羊のいる風景」の事務所から線路の向こうに、手にとるようにぼくが幼少期を過ごした部落が見える。以前久しぶりにそこを訪れた。豪勢な瓦葺の家、　洋館の狭間に、今も錆ついた低いブリキ屋根の家が、目に飛び込んできだ。

その昔隣人が不幸にあえば村中が共に悲しみ、結婚式があれば皆が祝い共に喜んだ。いつの頃からか、そのような往来が薄くなった。貧富の格差と理念対立の荒波が、この村をも飲み込んでしまったのか。そのような苦々しい感傷にひたったことが思い出される。

都理事長はいつか私に、金剛山観光地付近に養豚団地を作りたいと言われた。観光客らが残す残飯だけでも豚は育つ。それで飢える北側の子供たちにも、肉を食べさせたいと、少年のように目を輝かせた。

その想いが韓半島に南北鉄道が連結された今、平和定着への取組みの一環として北側地域に養豚団地を建設しようという考えにつながったのだ。

今回の韓国訪問時、現代蛾山の本社を訪れた。そこでぼくらは新政府になって、北側の1,000匹を越える豚が飼料運搬中断のせいで100匹余りを残し他は皆死んだという消息を聞いた。皆この上なく心を痛めた。

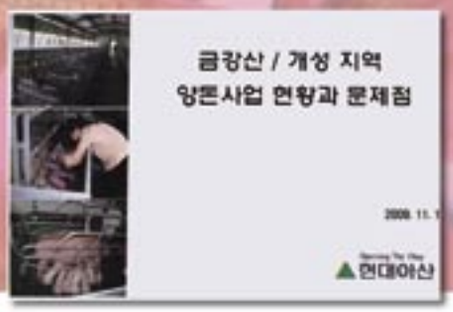
帰ってくる飛行機の中で都理事長は、己の生涯の仕事としてこれからも取組み続け必ず成功させると、　これが豚と共に生きてきた在日同胞らの地に足のついた統一運動だと力説していた。

利潤追求、思想と理念は冷徹な人間を産みやすい。そのような無機質なものには臭いがない。社会も人間生活でも、無機質な関係が多くみられる今日この頃である。だからこそ生活の底辺から湧きあがる、臭いの漂う活動家の出現を人々は待ちこがれている。

変わりゆく部落を眺められる豚舎の前で、ぼくはそのような思いに浸った。

「養豚団地」に一筋の光？

都理事長一行、現代峨山本社訪問



当日渡せれた資料

都相太理事長の右横が趙建植社長

三千里鐵道関係者は去る11月14日、現代峨山本社を訪問、趙建植社長はじめ金剛山観光地区養豚団地担当者を交え、養豚団地に関する現状と対策などを協議した。

今回の訪韓では思わぬ成果を上げた。北への養豚団地造成支援を10年間直に管理してきた担当者から、実情と課題をつぶさに聞けたことだ。最大の懸案は、北が世界防疫協定に加盟していないこと。南北間にもない。今すぐ北がそこに加盟できる状況にないなら「農畜産特区」を北域につくり、その特区内だけで加盟する道はあるかもしれない、と李鳳朝先生が発言、現在その方向で模索が続いている。

日韓『併合』100年
朝鮮戦争勃発60年
そして、6.15共同宣言10周年…

東北アジアの平和と私たちの役割

日時 6月27日(日) 午後2時

場所 名進研ホール（名古屋駅より徒歩5分）

招請 林東源先生
（6.15共同宣言当時の国家情報院院長、元統一部長官）
丁世鉉先生
（三千里鐵道募金伝達時の統一部長官）　他

2010年…

私たちは大変意味深い年を迎えました。

2000年の『6.15共同宣言』を契機にしてできたNPO法人三千里鐵道は、6.15共同宣言を記念する集会を毎年欠かさず開催してきましたが、今年は10周年にふさわしい行事を行う予定です。詳しくは、追って案内いたします。